

2 「漫画家の視点: 16-17 世紀に来日した宣教師たちの足跡は、潜伏キリシタンの島でどのような伝承になって語り継がれたか」

日時: 2025 年 3 月 18 日

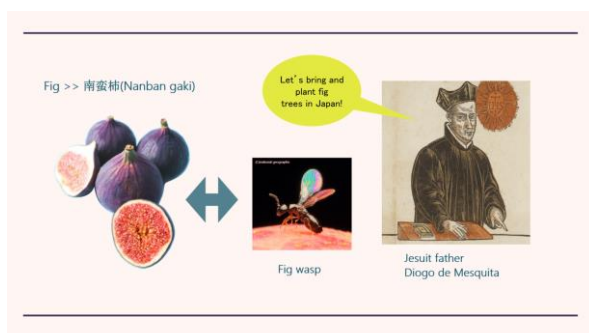
会場: 教皇庁立サレジオ大学



高浜さんは、「長崎三部作」に続けて、昨年より『獅子と牡丹』という新しい作品の連載を開始しました。これは、前「三部作」の登場人物らの先祖や子孫が出てくるサーガとなっています。この日は、この作品のために進めてきた調査研究の中から明らかになってきた、16 世紀から 17 世紀にかけて日本を訪れた宣教師たちと彼らが日本にもたらした影響について紹介しました。

1549 年のザビエルの日本到着から、もはや数十年前から禁教の続く日本に潜入しすぐに捉えられたシドーティ神父が亡くなる 1714 年まで、日本と宣教師らとの接触は、およそ 150 年にわたりました。この 4 世紀前の彼らの足跡が、長い禁教の時代を経てなお、日本に残る事例を、食や物、あるいは土地の名前に見ることができます。キリスト教に関わるもの、つまり禁教下においては「タブー」となり、隠す必要がありましたが、彼らのもたらしたものの中でも、直接信仰に関わらないものについては、その情報をそのままとどめている場合もあります。

例えば、食に関して言えば、「カステラ」や「金平糖」、「有平糖」、そして「ボウロ」など、日本で普及し、もはや伝統的なお菓子と考えられていますが、元々は宣教師らよりもたらされたもので、ポルトガル語やスペイン語の音をとどめています。



また、日本を代表する料理「てんぷら」は、ポルトガル語の Quatro Temperas(四旬節)を語源とする説が有力とされています。

興味深いのは、果物の「イチジク」の例です。天草地方では今でも「南蛮柿」と呼ばれているそうです。イチジクを最初に日本に輸入し

たのは、天正遣欧少年使節団の引率者となったイエズス会宣教師ディオゴ・デ・メスキータ神父でした。1599 年の彼の手紙の中に「リスボンからイチジクの苗を持ってきた。今、日本にはイチジクがいっぱいだ」と書かれています。残念ながら、彼が日本へもたらしたブリゲソテス種というイチジクは、結実のために必要な蜂が日本には存在せず、結局定着しませんでした。現在日本にあるイチジクは、17 世紀に中国から入った種なのですが、天草では今でも「南蛮柿」と呼ばれています。

禁教下において「切支丹根源記」、「伊吹蓬」、「南蛮寺興廃記」といった読み物が大衆に人気になりました。いずれも、バテレンと呼ばれる宣教師たちの物語で、彼らはスパイのような悪役として描かれ、日本人をだまそうとするも、やがて追い払われるといういずれも同じようなストーリーです。宗教自体は禁止されつつも、「キリシタンけしからん」と、過去の教訓として読む分には問題がなかったようです。

一方で、直接信仰に関わる場所、例えば元教会のあった場所やキリシタンの墓地についていえば、役人らによって破壊されることもあれば、キリシタンら自身によって隠されてきたこともありました。そして、人が近づかないよう、バリアとなったのが「呪い伝承」、すなわち、「近づくと呪われる、命を落とす」から触れてはいけない、といった伝承でした。

昔の教会跡地とされる場所、聖水をとるための場所、あるいは司祭の墓地とされている場所など、同じように「呪い伝承」によって、人が遠ざけられていました。

現在連載中の『獅子と牡丹』では、そうした「呪い」や「伝説」の場所が登場します。現在はまだ、1 巻が出たばかりですが、10 巻をかけて「宝探し」を通じて知られざる歴史をひもといていきます。漫画を読んで、また本日の講演を聞いて関心を持った方はぜひ天草を訪問しようと促し、この日の講演は終了しました。

(第 3 日目に続く)

